

中学進学に伴う不登校傾向の増減に関連するソーシャルサポート

五十嵐 哲也

養護教育講座

Children's Tendency toward Non-attendance at School and Social Supports in the Transition to Junior High School

Tetsuya IGARASHI

Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I 問題と目的

不登校に対しては、これまでも様々な支援の取り組みがなされている。それにもかかわらず、不登校を理由として長期欠席を行う児童生徒は微増と微減を繰り返している状況で、減少の気配が認められない。とりわけ、中学生での出現数の高さが問題となっており、文部科学省¹⁾は小学6年生に比較して中学1年生で約3倍の状況であることを示している。こうした状況は中1ギャップと言われ、昨今の学校教育における大きな課題となっている。実際、富家・宮前²⁾は、小学校、中学校双方の教師がこの問題を強く感じていることを指摘している。

また、登校していても「学校に行きたくない」と感じている児童生徒の存在も、看過できない。森田³⁾や本保・佐久川⁴⁾は、そうした児童生徒の数が相当数に上ることを明らかにしている。加えて五十嵐・萩原⁵⁾および五十嵐⁶⁾は、こうした状態について、登校は行っているが学校生活を楽しむことができていないということであり、不登校の前駆的状況として「不登校傾向」であると考え、その心理的構造を探っている。そこでは、小学生の不登校傾向が「休養を望む不登校傾向」「遊びを望む不登校傾向」の2側面であるのに対し、中学生では「別室登校を希望する不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」という4側面に分類されることが明らかとなった。このことは、中学生において登校している段階から「学校に行きたくない」気持ちが多様化することを示しており、中学校での不登校の急激な増加に関する背景を探る上で有用な視点を提供している。

では、不登校からの復帰、あるいは不登校傾向の減少には、どのような支援が有効であるのか。この点に

関して、ソーシャルサポートの視点からの研究が進んでいる。ソーシャルサポートは、児童生徒の有する社会的援助資源であり、ストレス理論から詳細な検討がなされている概念である。先行研究では、渡辺・蒲田⁷⁾が、実際に不登校に至っている中学生と登校している中学生の比較を行い、不登校児はソーシャルサポートの受領量とその満足度が低いことを示している。また、木原・三浦・田中⁸⁾は、中学生の家族や友人からのサポートの低さが友人関係における孤立を示し、学校に行きたくないと感じる傾向と関連していることを明らかにした。さらに渡辺・小石⁹⁾は、中学生の登校回避感情を規定するソーシャルサポートとして、特に父親と友人からのサポート満足度の低さがあげられることを指摘している。小中学生の双方に焦点を当てた研究としては、五十嵐¹⁰⁾がある。そこでは、小中学生ともに、様々な不登校傾向が父親・母親・教師・友人からのソーシャルサポートと関連していることが明らかにされている。そして、特に中学校段階での「精神・身体症状を伴う不登校傾向」や「在宅を希望する不登校傾向」は、友人を中心とした学校生活におけるソーシャルサポートが増加することによって低減していく可能性を示唆している。

以上のように、不登校あるいは不登校傾向は、あらゆるソーシャルサポートと密接に関連していることが推測される。しかしながら、それがいわゆる中1ギャップの問題にどのように関与しているのか、という点については、検討に乏しい。例えば、小野寺¹¹⁾は、小学校6年生の12月から中学校1年生の12月までの3回にわたり調査を実施し、学校嫌い感情への影響因を検討している。その要因としてソーシャルサポートも取り上げているが、各時期ごとの影響因の検討であって、変化に着目した検証はなされていない。また、浅川・尾崎・古川¹²⁾や加藤・木村¹³⁾は中学新入生や小中移

行期の問題に触れ、親や教師、友人などの対人関係に言及しているものの、いずれも登校に対する感情とそれらとの関連性について変化の観点からは検討していない。

したがって、本研究では、登校している児童生徒における不登校傾向に注目し、その小学校から中学校への進学に伴う変化を検討する。そして、その増大に関与するソーシャルサポートは何かを特定することを目的とする。その際、中学校に至って不登校傾向が多様化するとの先行研究⁶⁾を踏まえ、各不登校傾向の違いにも着目し、検証を加えることとする。これらを通じ、中学校で急激に増大する不登校を未然に予防するためには、誰がサポート機能を発揮することが有効か、という点を明らかにできるものと考えられる。

II 方法

1. 調査対象

A 県内の公立 B・C・D 小学校から公立 E 中学校へ、ならびに F 県内の公立 G・H・I 小学校から公立 J 中学校へ進学した1年生のうち、全ての調査に漏れなく記入した383名を対象とした。内訳は、E 中学校1年生191名（男子102名、女子89名）、J 中学校1年生192名（男子101名、女子91名）であった。

2. 調査時期と手続き

調査は、対象者が小学校6年生に在籍していた2008年度3学期（2009年1月～3月であり、以下、小学校段階と記す）と、中学校1年生に在籍していた2009年度1学期（2009年4月～7月であり、以下、中学校段階と記す）の合計2回実施された。いずれも各学級で学級担任が一斉に実施し、その場で回収された。

小学校段階と中学校段階のデータの対応については、調査用紙に記入された学級名と出席番号を用いた。小学校段階の学級名と出席番号、ならびに中学校段階の学級名と出席番号は、調査協力者である各中学校教職員によって対応状況が検証された。この作業にあたり、調査協力者に対して個別的な調査結果は通知していない。また、氏名などの個人を特定する情報は、調査協力者から提供を受けないこととした。これらのデータ対応を含め、調査全体について事前に各学校への説明を実施し、書面にて各小中学校長の了承を得た。

3. 調査内容

フェイスシートで性別、学年、学級名、出席番号、年齢について尋ねた後、以下の項目について回答を求めた。

(1) 不登校傾向

小学校段階では五十嵐⁶⁾の小学生用不登校傾向尺度10項目、中学校段階では五十嵐・萩原⁵⁾の中学生用不登校傾向尺度13項目を用いた。小学生用不登校傾向尺度は「休養を望む不登校傾向」「遊びを望む不登校傾向」の2因子構造、中学生用不登校傾向尺度は「別室登校を希望する不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」の4因子構造である。4件法で回答を求めた。

(2) ソーシャルサポート

小学校段階では岡安・由地・高山¹⁴⁾の児童用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）、中学校段階では岡安・高山¹⁵⁾の中学生用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）のうち、ソーシャルサポートに関する部分をそれぞれ使用した。これは、父親、母親、教師、友人の各サポート源について、各提示項目があてはまるか否かを問うものである。小学校段階では3項目、中学校段階では4項目である。4件法により回答を求めた。

III 結果

1. 小学校段階における不登校傾向とソーシャルサポートとの関連

小学校段階での不登校傾向の状況について、ソーシャルサポートとの関連性を検討するため、Pearsonの積率相関係数を求めた。

その結果（Table1）、「休養を望む不登校傾向」については、いずれも弱程度ながら、全てのソーシャルサポートと有意な負の相関関係あるいは相関傾向が認められた。一方、「遊びを望む不登校傾向」については、友人サポートにおいて有意な結果が得られなかった。それ以外の各サポート源との間には、弱程度の有意な負の相関関係が示された。

2. 中学校段階における不登校傾向とソーシャルサポートとの関連

中学校段階での不登校傾向の状況について、ソー

Table1 小学校段階での不登校傾向とソーシャルサポートとの関連

	父親 サポート	母親 サポート	教師 サポート	友人 サポート
休養を望む不登校傾向	-.10 †	-.10 †	-.13 *	-.12 *
遊びを望む不登校傾向	-.15 *	-.26 ***	-.18 **	-.06
	† $p < .10$	* $p < .05$	** $p < .01$	*** $p < .001$

Table2 中学校段階での不登校傾向とソーシャルサポートとの関連

	父親 サポート	母親 サポート	教師 サポート	友人 サポート
別室登校を希望する不登校傾向	-.17 **	-.15 **	-.22 ***	-.15 **
遊び・非行に関連する不登校傾向	-.17 **	-.28 ***	-.19 ***	-.07
精神・身体症状を伴う不登校傾向	-.23 ***	-.25 ***	-.25 ***	-.22 ***
在宅を希望する不登校傾向	-.21 ***	-.29 ***	-.26 ***	-.30 ***

** $p < .01$ *** $p < .001$

シャルサポートとの関連性を検討するため、同様に Pearson の積率相関係数を算出した。

その結果 (Table2), 「別室登校を希望する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」では、いずれも弱程度ながら、全てのソーシャルサポートとの間に有意な負の相関関係が認められた。一方で、「遊び・非行に関連する不登校傾向」においては、友人サポートとの間に有意な結果が認められなかった。それ以外の各サポート源との間には、弱程度の有意な負の相関関係が認められた。

3. 中学進学に伴う不登校傾向の増減と各学校段階におけるソーシャルサポートとの関連

中学校への進学に伴う不登校傾向の増減に対し、ソーシャルサポートはどのように関与しているのかを明らかにすることとした。

しかしながら、各学校段階の不登校傾向尺度は構造が異なるため下位尺度間の対応関係が明確ではなく、単純に比較を行うことができない。本研究では、中学校での不登校傾向の多様化に着目していることから、ここでは小学校段階の2つの下位尺度を合計することによって、新たに「小学校段階の不登校傾向総得点」という合成変数を算出することとした。その上で、小学校段階の全般的な不登校傾向の状態と、中学校段階での各不登校傾向の状態を比較し、その増減を明らかにすることとした。なお、本研究における小学校段階の不登校傾向の下位尺度間の相関係数は $r = .34 (p < .001)$ であり、弱程度ながら有意な相関関係が認められた。このことから、合成変数の算出は妥当であると考えられる。

小学校段階の全般的な不登校傾向の状態と、中学校段階での各不登校傾向の状態の比較においては、中学校段階の不登校傾向各下位尺度得点から、小学校段階の不登校傾向総得点を減じ、中学校段階で各不登校傾向が上昇した群と下降した群を抽出することとした。なお、得点は、比較可能なものとするために標準得点化した。これによって、減じた結果が正の値である者を上昇群、負の値である者を下降群とした。

以上の手続きにより、この2群間におけるソーシャルサポートの差を検討することとした。しかしながら、その結果は、小学校段階における不登校傾向総得点、

および中学校段階での各不登校傾向得点、それぞれの高さ、低さによって左右される可能性がある。つまり、同じ上昇群であったとしても、当初より不登校傾向が強い状態の者とそうでない者とは、そもそもソーシャルサポートに差があると考えられる。このことは、Table1 および Table2 の結果から推察される。そこで、各学校段階の不登校傾向の平均値を基準とした高低も組み合わせて検討する必要があると判断した。

具体的には、(A) 小学校段階で不登校傾向総得点高群であり、かつ中学校で上昇し、中学校段階で各不登校傾向高群の者 (以下、一貫高群)、(B) 小学校段階で不登校傾向総得点低群であったが、中学校で上昇し、中学校段階で各不登校傾向高群の者 (以下、上昇高群)、(C) 小学校段階で不登校傾向総得点高群であったが、中学校で下降し、中学校段階で各不登校傾向低群の者 (以下、下降低群)、(D) 小学校段階で不登校傾向総得点低群であり、かつ中学校で下降し、中学校段階で各不登校傾向低群の者 (以下、一貫低群)、の4群間比較を行うこととした。そこで、ソーシャルサポートを従属変数とし、これらの群分けを要因とした1要因分散分析を実施した。以下、中学校段階の不登校傾向の下位尺度ごとに、その結果を示す。

(1) 別室登校を希望する不登校傾向の増減とソーシャルサポートとの関連 (Table3)

いずれの学校段階においても、全てのソーシャルサポートと関連が認められなかった。

(2) 遊び・非行に関連する不登校傾向の増減とソーシャルサポートとの関連 (Table4)

小学校段階においては、母親サポートならびに友人サポートにおいて有意な結果が得られた。Tukey 法による多重比較を実施したところ、母親サポートにおいては、小学校段階で高群である「一貫高群」「下降低群」が、小中にわたり低群である「一貫低群」に比較して得点が低いことが明らかとなった。友人サポートについては、中学校段階で高群である「一貫高群」「上昇高群」において、「下降低群」よりも得点が高いことが示された。

中学校段階においては、母親サポートと教師サポートで有意差または有意傾向が示された。Tukey 法による多重比較の結果、いずれのサポートについても、「一貫低群」よりも「一貫高群」の得点が低いということ

Table3 小・不登校傾向総得点から中・別室への変化によるソーシャルサポートの差

	(A)一貫高群 (<i>n</i> =42)		(B)上昇高群 (<i>n</i> =16)		(c)下降低群 (<i>n</i> =92)		(D)一貫低群 (<i>n</i> =34)		F 値
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		
	【小学校段階】								
父親サポート	2.91	(.84)	3.04	(.69)	2.76	(.77)	2.75	(.79)	.92
母親サポート	3.11	(.66)	3.38	(.65)	3.07	(.70)	3.25	(.73)	1.18
教師サポート	2.53	(.74)	2.54	(.68)	2.48	(.72)	2.53	(.75)	.08
友人サポート	3.08	(.79)	3.02	(.82)	3.04	(.77)	3.04	(.66)	.03
【中学校段階】									
父親サポート	2.67	(.83)	2.92	(.81)	2.82	(.86)	2.95	(.72)	.81
母親サポート	3.11	(.78)	3.28	(.89)	3.21	(.75)	3.33	(.69)	.59
教師サポート	2.65	(.84)	2.67	(.66)	2.85	(.62)	2.84	(.72)	.97
友人サポート	2.99	(.85)	3.09	(.77)	3.06	(.75)	3.04	(.66)	.09

Table4 小・不登校傾向総得点から中・別室への変化によるソーシャルサポートの差

	(A)一貫高群 (<i>n</i> =60)		(B)上昇高群 (<i>n</i> =39)		(c)下降低群 (<i>n</i> =53)		(D)一貫低群 (<i>n</i> =51)		F 値	多重比較
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)			
	【小学校段階】									
父親サポート	2.86	(.73)	3.02	(.70)	2.80	(.89)	2.90	(.84)	.59	
母親サポート	3.08	(.68)	3.41	(.61)	2.97	(.84)	3.42	(.63)	5.34	** D>AC
教師サポート	2.61	(.71)	2.43	(.84)	2.39	(.75)	2.71	(.71)	2.01	
友人サポート	3.26	(.67)	3.27	(.70)	2.90	(.86)	3.01	(.75)	3.07	* AB>C
【中学校段階】										
父親サポート	2.65	(.85)	2.77	(.83)	2.87	(.90)	3.01	(.84)	1.73	
母親サポート	2.95	(.83)	3.15	(.82)	3.19	(.81)	3.52	(.59)	5.03	** D>A
教師サポート	2.73	(.78)	2.71	(.86)	2.82	(.69)	3.06	(.60)	2.49	† D>A
友人サポート	3.12	(.73)	3.13	(.72)	2.89	(.79)	3.11	(.73)	1.29	

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

Table5 小・不登校傾向総得点から中・精神への変化によるソーシャルサポートの差

	(A)一貫高群 (<i>n</i> =54)		(B)上昇高群 (<i>n</i> =34)		(c)下降低群 (<i>n</i> =65)		(D)一貫低群 (<i>n</i> =38)		F 値
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		
	【小学校段階】								
父親サポート	2.85	(.75)	2.61	(.93)	2.81	(.82)	2.97	(.69)	1.31
母親サポート	3.01	(.76)	3.27	(.76)	3.12	(.69)	3.25	(.75)	1.20
教師サポート	2.56	(.78)	2.37	(.72)	2.50	(.70)	2.64	(.72)	.86
友人サポート	3.15	(.77)	2.95	(.88)	3.04	(.73)	2.97	(.69)	.61
【中学校段階】									
父親サポート	2.71	(.89)	2.60	(.93)	2.82	(.83)	3.05	(.69)	2.02
母親サポート	3.02	(.82)	3.24	(.85)	3.25	(.71)	3.38	(.66)	1.81
教師サポート	2.69	(.79)	2.65	(.79)	2.87	(.68)	2.99	(.70)	1.91
友人サポート	2.88	(.84)	2.98	(.77)	3.11	(.70)	2.95	(.72)	.90

Table6 小・不登校傾向総得点から中・在宅への変化によるソーシャルサポートの差

	(A)一貫高群 (<i>n</i> =56)	(B)上昇高群 (<i>n</i> =33)	(c)下降低群 (<i>n</i> =67)	(D)一貫低群 (<i>n</i> =52)	<i>F</i> 値	多重比較
	<i>M</i> (<i>SD</i>)					
【小学校段階】						
父親サポート	2.70 (.80)	2.81 (.86)	2.93 (.76)	2.97 (.76)	1.31	
母親サポート	2.96 (.78)	3.27 (.75)	3.17 (.65)	3.37 (.65)	3.26 *	D>A
教師サポート	2.56 (.68)	2.42 (.78)	2.51 (.80)	2.63 (.76)	.54	
友人サポート	2.92 (.72)	2.94 (.84)	3.19 (.75)	3.12 (.70)	1.74	
【中学校段階】						
父親サポート	2.60 (.85)	2.70 (.78)	2.92 (.81)	3.09 (.75)	3.92 **	D>A
母親サポート	2.97 (.88)	3.08 (.80)	3.28 (.70)	3.46 (.60)	4.32 **	D>A
教師サポート	2.57 (.83)	2.61 (.72)	3.01 (.60)	2.98 (.69)	5.71 ***	CD>AB
友人サポート	2.71 (.88)	2.93 (.69)	3.26 (.62)	3.19 (.67)	7.09 ***	CD>A
					* <i>p</i> <.05	** <i>p</i> <.01
						*** <i>p</i> <.001

が明らかとなった。

(3) 精神・身体症状を伴う不登校傾向の増減とソーシャルサポートとの関連 (Table5)

いずれの学校段階においても、全てのソーシャルサポートと関連が認められなかった。

(4) 在宅を希望する不登校傾向の増減とソーシャルサポートとの関連 (Table6)

小学校段階においては、母親サポートで有意差が認められた。Tukey法による多重比較の結果、「一貫低群」よりも「一貫高群」の得点が低いということが明らかとなった。

中学校段階においては、全てのソーシャルサポートについて有意な結果が得られた。Tukey法による多重比較を実施したところ、父親サポートおよび母親サポートでは、「一貫低群」よりも「一貫高群」の得点が低いということが示された。また、教師サポートおよび友人サポートでは、概して、中学校で不登校傾向が低下した者に比べ、増加した者の得点が低いという結果が得られた。

IV 考察

まず、各学校段階別の不登校傾向とソーシャルサポートとの関連を検討したところ、ほぼ全ての変数間に負の相関関係あるいは相関傾向が認められた。このことは、様々なサポート源からのソーシャルサポートの受領を感じるにより、不登校傾向が弱まっていく可能性を示唆するものである。これは、五十嵐¹⁰⁾の結果にほぼ一致している。

しかしながら、小学校段階での「遊びを望む不登校傾向」ならびに中学校段階での「遊び・非行に関連する不登校傾向」では、友人サポートについて有意な結果が得られなかった。これらは、怠学傾向と称されるような傾向に近い状態であると推測される。藤野¹⁶⁾は、

男子非行少年の友人関係について、うわべを取り繕うような希薄な人間関係を形成しているわけではないことを指摘している。すなわち、非行的な行為がある場合、その友人集団内部では信頼に満ちた関係性が形成されていることも多く、個々人の認知としては友人関係の満足度は高い可能性がある。本研究で測定している小学校段階での「遊びを望む不登校傾向」ならびに中学校段階での「遊び・非行に関連する不登校傾向」は、非行行動そのものを測定しているわけではなく、また回答者の非行深度に言及したものでない。だが、藤野¹⁶⁾の指摘を踏まえると、友人関係のサポート受領と「遊びを望む不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」が直接的に関連を示すものではないという本研究の結果は、理解できるものである。

この点に関しては、中学進学に伴って「遊び・非行に関連する不登校傾向」が増大した者が、低減した者に比べて小学校段階での友人サポートが高い、という結果 (Table4) にも関与している。すなわち、小学校在籍中、友人サポートを多く受領していると感じていた者の方が、中学進学後に「遊び・非行に関連する不登校傾向」を増大させやすいということである。したがって、友人間での良好な関係性が、学校外での享乐的な活動への志向性へと結びついてしまう可能性が示唆される。この点を検証するためには、友人関係の質をも併せた検討が必要となろう。ただし、今回の中学校段階でのソーシャルサポートとの関連性を考えると、これらの不登校傾向の低減のためには、親や教師による大人からのサポート提供量の増加が有効であるということが示唆される。

その他の中学進学に伴う不登校傾向の増減に着目すると、その不登校傾向の質的差異によって、ソーシャルサポートの関与状況は様々に異なる様相を呈していた。まず「別室登校を希望する不登校傾向」の増減に

ついて検討したところ、ソーシャルサポートの関与は認められないという結果が得られた。「別室登校を希望する不登校傾向」は、登校しながらも教室で授業等を受けて過ごすのではなく、保健室、相談室などで過ごすことを希望する傾向である。この傾向の増減について五十嵐・萩原¹⁷⁾は、「別室」を構成する養護教諭（保健室）やスクールカウンセラー（相談室）といった教職員との関係性の状況が大きく関与する、ということを示唆している。したがって、たとえ教室では過ごしたくないと感じていたとしても、これらの教職員と新たな関係構築をすることが困難であったり、また関係維持が難しい場合には、別室で過ごしたいという気持ちには至らないと推察される。そのため、本研究で検討したようなサポート源のみでは測定することができない面が関与していると考えられるため、今後の検討が必要となっている。

また「精神・身体症状を伴う不登校傾向」の増減においても、ソーシャルサポートとの関連性は認められなかった。「精神・身体症状を伴う不登校傾向」の項目を見ると⁵⁾、「気分の落ち込み」のような抑うつ的な状態や、頭痛や吐き気などの身体症状を尋ねているものが含まれる。岡安・嶋田・坂野¹⁸⁾は、中学生のストレス反応のうち「抑うつ・不安」「身体的反応」はソーシャルサポートによる軽減効果が得られにくいものである、ということを示唆している。本研究の結果はこれに一致するものと考えられ、精神症状や身体症状を呈するような比較的重篤と考えられる不登校傾向状態が増大した場合は、ソーシャルサポート受領量の増大のみによっては有効な支援とはなりにくいと示唆される。このことから、ソーシャルサポートの満足度などの他の指標を用いた、さらなる研究の蓄積が必要であると考えられる。

「遊び・非行に関連する不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」の増大については、各学校段階でいくつかのサポート源の有効性が認められた。その中で、学校段階や不登校傾向の違いによらず共通して有効性が示唆されたのは、母親サポートである。このことは、中学生が母親に抱く信頼感が反社会的傾向に負の関連を示す¹⁹⁾、青年前期の知覚された母親サポートとひきこもり傾向は負の相関関係にある²⁰⁾という知見に一致している。なお、「在宅を希望する不登校傾向」の増大には、中学校段階での父親、教師、友人からのソーシャルサポートも関与しており、Rubin, Dwyer, Kim, Burgess, Booth-Laforce, and Rose-Krasnor²⁰⁾ および Rubin, Coplan, and Bowker²¹⁾ の指摘に一致する結果が得られた。あらゆる対人関係上の困難を感じることに、それらの関係性を避けるために「在宅を希望する不登校傾向」が増大する可能性が示唆される。したがって、様々なサポート源が協力・連携してサポート量を増加させることにより、「在宅を希望する不登校

傾向」の低減に結びつけることができるのではないかと推察される。また、小学校段階では母親サポートのみであったことを考え合わせると、この結果は、発達の的に自己と他者への過敏な意識が高まる青年期心性の要素が関与しているかもしれない。この点についてさらなる検討を加えるために、より長期にわたる縦断的検証が必要であろう。

謝辞

本研究の実施に際し、多くの小中学生ならびに教職員の皆様に快く調査にご協力いただきました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

なお、本研究は科学研究費補助金（課題番号：20730432）の助成を受けた。

文献

- 1) 文部科学省 2009 平成 20 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果（小中不登校等）について
- 2) 富家美那子・宮前淳子 2009 教師の視点からみた中 1 ギャップに関する研究 香川大学教育実践総合研究, 18, 89-101.
- 3) 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- 4) 本保恭子・佐久川肇 1993 中学生の不登校願望に関する意識調査 小児の精神と神経, 33 (3・4), 283-290.
- 5) 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 6) 五十嵐哲也 2010 小学生用不登校傾向尺度の作成と信頼性・妥当性に関する検討 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 211-216.
- 7) 渡辺弥生・蒲田いずみ 1999 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル—登校児と不登校児の比較— 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）, 49, 337-351.
- 8) 木原律・三浦正江・田中信利 2003 中学生の登校回避感情とソーシャルサポートに関する検討 広島国際大学心理臨床センター紀要, 2, 38-46.
- 9) 渡辺葉一・小石寛文 2000 中学生の登校回避感情とその規定要因—ソーシャル・サポートとの関連を中心にして— 神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 1-12.
- 10) 五十嵐哲也 2009 小中学生の不登校傾向とソーシャルサポートとの関連 愛知教育大学保健環境センター紀要, 8, 3-9.
- 11) 小野寺汐美 2009 小中移行期における学校適応過程に関する一研究 岩手大学大学院人文社会科学研究紀要, 18, 19-40.
- 12) 浅川潔司・尾崎高弘・古川雅文 2003 中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要 第 1 分冊学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育, 23, 81-88.
- 13) 加藤美帆・木村文香 2007 小中移行期における「学校不適応」に関する考察—パネル調査の分析から— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 67-73.
- 14) 岡安孝弘・由地多恵子・高山巖 1998 児童用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）の作成とその実践的利用

- 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, 5, 27-41.
- 15) 岡安孝弘・高山巖 1999 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, 6, 73-84.
 - 16) 藤野京子 2002 男子非行少年の交友関係の分析 教育心理学研究, 50, 403-411.
 - 17) 五十嵐哲也・萩原久子 2009 中学生の一学年間における不登校傾向の変化と学級適応感との関連 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 335-342.
 - 18) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
 - 19) 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
 - 20) Rubin, K. H., Dwyer, K. M., Kim, A. H., Burgess, K. B., Booth-Laforce, C., and Rose-Krasnor, L. 2004 Attachment, Friendship, and Psychosocial Functioning in Early Adolescence. *The Journal of Early Adolescence*, 24, 326-356.
 - 21) Rubin, K. H., Coplan, R. J., and Bowker, J. C. 2009 Social withdrawal in childhood. *Annual review of psychology*, 60, 141-171.

(2010年9月15日受理)